

マドゥーとボスニアと三陸地方への想い

医師 貫戸朋子



マドゥー（スリランカ）にて

“Crossing the Border” (CROWN II Lesson 4) を全国の高校の先生方が熱心に教えてくださり、そして、生徒の皆さんが何かを感じ考えて読んでくださっていることを伺い、なんだか恥ずかしいのですが、とても嬉しく思い感謝しております。

マドゥー難民キャンプの日常生活とその日々を通して考えたことを、慶応大学の霜崎先生が美しい英語で表現してくださいました。私が経験したことは、決して特殊なことではありません。世界のいたるところで起こっていることで、私が感じたこと考えたことは、人の役に立ちたいと海外や日本で働いた経験を持つ多くの人々と根っこ部分を共有していると思っています。

マドゥー難民キャンプでは、内戦で家を追われた人々が助けあって整然と暮らしていました。故郷に帰れない日々が長くなって、お年寄りも難民生活の中で亡くなり、いっぽう難民キャンプで生まれた子どもたちがすくすく育っていました。子どもたちは、まさに希望の星でした。が、その子どもたちも、成長するにつれて、大人たちの苦悩と憂鬱を感じるようになり、自分の故郷は難民キャンプではないことを知り、きらきらした顔に淋しく悲しい表情を見せ始めるのでした。

ボスニアでは、民族浄化により国土が徹底的に破壊つくされました。出張中に町が攻撃され、妻と小学生の息子と娘を殺されて焼かれて、肌身離さず持っていた写真だけが残された男性。村で

たった一人生き残って彷徨っていた耳の聞こえない幼い男の子。地雷原を逃げ惑う中に子どもを失い二度と再会することのなかった母親。住民を山に避難させた後に、極右武装勢力へ交渉に向き処刑された警察官。

「つなみてんでんこ」という言い伝えが三陸地方にあることを、2011年3月11日のあとに知りました。「津波が来たら、親も子も捨てて真っ先に逃げよ」。生半可では生きていけないと宣言しているかのこの言葉に私は衝撃を受け、この言い伝えを生み出した三陸地方の人々に心底敬服しました。しかしながら、実際はこの言い伝えを超越して、人々を助けようとして、あるいは助けて逝った人々が大量に亡くなったのでした。

生き残った人々、愛する人を失った人々は、どのような思いで毎日毎日暮らしておられるのでしょうか。想像しようとするだけで苦しくなるのですが、きっと自問自答を繰り返してられるに違いありません。生き続けなければいけないと思いなおしても、苦悶苦闘してられるに違いありません。ただ一つ私にもわかることは、生き残ってくださって、生きていてくださってありがとうと皆が心から思っていることです。

3月11日の東日本大震災で亡くなられた人々、お年寄りから赤ちゃんまであらゆる人々に想いを馳せるとき、私はこの人々は私たちの代わりに犠牲になってくださったという気がしてならないのです。それでは、犠牲者への弔いはどうすればよいのでしょうか。私たち一人一人がこれからのように生きて、どのような社会を築いていくか、そのことが課せられていると考えます。